

非犯罪者のサイパス類型におけるパーソナリティ 特性および精神病理の検討

著者	金子 周平
雑誌名	人間学研究論集
号	7
ページ	129-139
発行年	2018-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000764/

非犯罪者のサイコパス類型における パーソナリティ特性および精神病理の検討

金子周平

1. はじめに

精神病質パーソナリティ (psychopathic personality)、いわゆるサイコパス (psychopaths) の概念については、1896年にKraepelinが臨床場面を通じて彼らの支配的なパーソナリティ特徴に従った類型学的分類を行ったことが起源とされる (Schneider, 1946)。この“psychopathic personality”という用語は、“psychopaths”の古典的な呼称である (Veronaら, 2001)。昨今の行動やパーソナリティに認められる異常な現象を研究対象とする異常心理学 (abnormal psychology) やパーソナリティ研究の領域では、“psychopaths”という記述表記で用いられることが一般的である (Hare, 1984; Ishikawaら, 2001; Lynam, 1998; Mullins-Sweattら, 2010; Sellbom & Verona, 2007; Veronaら, 2001)。したがって、本稿においては、過去の先行研究において精神病質パーソナリティという記述がなされていた場合であっても、概念の混乱を避けるために、呼称をサイコパスと統一して記述していく。

ところで、Schneider (1946) はサイコパスを、本人がその異常性に苦しむ、あるいは社会がそれに苦しめられるパーソナリティであるとした。彼はKraepelinの方法論に基づき、サイコパスの一連の類型として、発揚性、抑うつ性、自信欠乏性、狂信性、顕示性、気分易変性、爆発性、情性欠如性、意志欠如性、無力性の10の特性を挙げた。例えば、情性欠如性に関しては、羞恥、名誉感情、後悔、良心がまったくあるいはほとんどない人であるとともに、そのあり方はしばしば暗く、冷淡で、愚痴が多く、その行為はしばしば活動的で粗暴であると記述されている。Schneiderは、これら一連のサイコパス特性を先天的、素質的な個性として解釈している。

Schneider以降、サイコパスの特性についての評価や分析の仕方に対しては、20世紀中盤にかけて様々な論争が巻き起こされてきた。主な批判や疑問として、サイコパス概念の妥当性や本質性の問題、またその評価や分析に対する主観性の問題が挙げられる (Blackburn, 1975; Freyhan, 1951)。Freyhan (1951) は、サイコパス概念の統一的な基準や準拠枠が存在しないために、様々な研究者によって、様々なサイコパスの概念が生み出されてきたと言及している。加えて、精神科医療において、サイコパスという診断体型や疾患名が存在しているわけではない。したがって、何の要件をもってサイコパスに当てはまるのかは研究者の主観的定義に沿うものが多かったといえる。

しかし近年では、サイコパスについてはCleckley (1976) の定義に基づき、その特性を測定するための妥当性が保証された尺度が開発されている (Benningら, 2003)。代表的な尺度とし

て、The psychopathic personality inventory (PPI) が挙げられる。PPI を用いた先行研究では、サイコパスの神経心理学的機能との関連性や、衝動性との関連性を検討する実証的な研究がなされている (Morgan ら, 2011; Sellbom & Verona, 2007)。

しかしながら、これらの研究では、PPI に基づくサイコパス類型と認知機能との関連、あるいは衝動性との関連を検討し、考察することに留まり、サイコパス類型におけるパーソナリティ特徴や精神病理については限定的に言及されているのみである。したがって、より包括的にサイコパスの諸特性を整理するとともに、彼らの行動上の問題や精神病理と関連する知見と結び合わせ、サイコパスについての理解や認識を深める必要があると考えられる。

そこで、錯綜するサイコパス概念についての定義や概念を整理した上で、サイコパスのパーソナリティ特性および精神病理について、現時点で明らかにされている範囲で考察することを本稿の目的とする。

2. サイコパス概念

2-1. サイコパスの定義

Freyhan (1951) は、20 世紀の始まりからその後 50 年を通じて、サイコパス概念が様々な公式化あるいは再公式化される段階を経ていることから、この概念が精神医学における極めて関心の高い研究領域であると述べている。しかし彼はサイコパス概念の妥当性や本質性の問題故に、サイコパスという用語を用いることの限界や、そこで適用されるサイコパスの要件が承認されるべき尺度になりうるのかどうかに疑問を投げかけた。

そこで Freyhan は臨床場面を通じて、サイコパスの極めて特異な機能不全や人格的な機能の側面に焦点を当てることで、サイコパスにおける様々な概念の障壁を取り除きうると考えた。彼によれば、サイコパスは日常生活において自らの立ち位置や振る舞いを体験、認識する様式、および社会的行動を通じて他者に働きかける様式が、その社会を構成する成員と比して異なっている。彼はサイコパスの機能不全については、情緒、意欲、共感の3つの側面の欠如によって引き起こされると主張した。

他方、Cleckley (1976) は精神科入院患者との臨床場面の中で、サイコパスの情緒および対人関係の様々な徴候に対してより強く着目した。彼は自身の研究論文である「狂気の仮面 (The Mask of Sanity)」の中で、サイコパスを、感情および対人関係上の独特な性質を表す個人として定義づけた。その上で彼はサイコパシー (psychopathy) を、情緒的な文脈において行動化する衝動性、および対人関係上の無関心さによって特徴づけられる人格上の障害であるとした。

Lynam (1998) は、Cleckley が主張したサイコパスの諸特徴として、易刺激性、冷淡、衝動的、無責任、自己中心的、感情的に浅はか、操作的、共感性の欠如、不安、自責、そして様々な犯罪行動に従事することなどを挙げた。さらに Sellbom & Verona (2007) によれば、これらの諸特徴はまた、「情緒-対人関係 (affective-interpersonal)」と、「社会的逸脱 (social deviance)」の2つの主要な側面に分類される。「情緒-対人関係」側面では、ごまかし、表面的な魅力、感情的に冷淡といった特性が含まれる。一方、「社会的逸脱」の側面では、衝動性、無責任、社会通念に従うことの困難といった特性が含まれる。

2-2. サイコパシー尺度開発の流れ

Benningら（2003）や Veronaら（2001）によれば、Cleckley（1976）によるサイコパス基準は、Hare（1991）によって開発された Psychopathy Checklist-Revised（PCL-R）の構成項目に取り込まれた。PCL-Rは、犯罪加害者のサイコパシーを測定することを目的として開発され、全20項目から成る。

PCL-Rは二つの要因を含む。要因1（PCL-R F1）では、サイコパスの感情的、および対人関係上の傾向が反映される項目によって特徴づけられている。具体的には、自責、共感性、あるいは感情の深さの欠如、責任の外罰化、魅力、誇大的、虚言、操作性といった傾向が挙げられる。その一方、要因2（PCL-R F2）では、サイコパスの慢性的な社会的逸脱が反映される項目によって特徴づけられている。具体的には、早期の行動上の問題、非行、刺激性追求、攻撃性、衝動性、他人への寄生、無責任、計画の失敗などの傾向が挙げられる。

Morganら（2011）は、PCL-Rは最も広く用いられ、サイコパシーを測定する最も有効な尺度であると主張している。しかし彼らによると、PCL-Rは犯罪成員を対象に用いることに特化した尺度であり、また全てを記入し終えるまで時間がかかるという欠点を有する。そのことは、通常のコミュニティにおいて用いられることに対しては明らかに不適當である。それゆえに、Morganらは、通常のコミュニティにおける成員に対しても用いられることに特化したサイコパシーの自記式尺度の開発が促されてきたと説明している。

Benningらや Sellbom & Verona（2007）によれば、Lilienfeld & Andrews（1996）によって開発された The psychopathic personality inventory（PPI）は、PCL-Rの種々の問題点を解消した尺度である。PPIは通常のコミュニティに存在する成員、および非取容者における、Cleckleyのサイコパス要件に基づいた精神病理的な特性を査定することを目的とした尺度である。

因子分析により、PPIはPCL-Rと同様に、「情緒－対人関係（PPI-I）」要因と、「社会的逸脱（PPI-II）」要因の2要因の構造に分けられる。「情緒－対人関係」要因では、サイコパシーにおける狡猾さ、表面上の魅力、そして情緒的な冷淡さといった対人的または情緒的側面が測定される。その一方で「社会的逸脱」要因では、サイコパシーにおける衝動性、無責任さ、そして社会通念に従うことの困難さといった社会的逸脱の側面が測定される。加えてBenningらは、PPIとPCL-Rは互いに並行して関連していることも実証している。具体的には、PPI-IとPCL-RのFactor1の両者はアルコールや薬物乱用の指標とは全く関連していない。その一方で、PCL-RのFactor2およびPPI-IIの両者は共に反社会的行動の指標と関連していた。

以上のように、今日ではCleckleyが提唱したサイコパス基準が継承され、犯罪成員のサイコパシーを測定するPCL-Rと、非犯罪者のサイコパシーを測定するPPIが開発されている。したがって、我々は一般のコミュニティに存在する通常の個人のサイコパシーを客観的な指標に基づき測定することが可能となっている。

PPIの妥当性に関しては、BenningらはPPIのそれぞれの構成概念がどの既存の尺度と関連しているかについての実証的な研究を行っている。以下ではその点について詳述する。

3. PPIに基づくサイコパシーと諸要因との関連性

3-1. サイコパスの知能、行動上の問題および気質

Benningら(2003)は、PPIの妥当性を立証するためには、実際に通常のコミュニティに存在する個人のサイコパシーの構成要因が、行動およびパーソナリティの構成概念を測定する既存尺度といかに関連しているかを実証的に検討する必要があると主張した。

そこでBenningらは、353名の双子の成人男性を対象とし、一般のコミュニティ内のPPIの構成要因を検証し、幼少期や成人期における反社会的行動、アルコールや薬物使用、言語性知能、社会的経済的地位指標、そしてパーソナリティ特性を含む既存の尺度との関連を検討した。パーソナリティを測定する既存の尺度については、Tellegen(1982)によって開発されたMultidimensional Personality Questionnaire(MPQ)が用いられた。

Veronaら(2001)の記述によれば、MPQはそれぞれ異なったパーソナリティ概念を測定し、11の主要な特性を含んでいる。それぞれのパーソナリティ特性は、Positive Emotionality(PEM)、Negative Emotionality(NEM)、Constraint(CON)と呼ばれるより大きな3つの気質次元に集約される。気質とは、感情的な刺激に対する自動的な個人の反応の傾向であり、遺伝性が高い行動傾向とされる(Gruczaら, 2003)。PEM次元は、肯定的な感情、優越感、野心、および他者と楽しく関わることに對する傾向を反映する要因である。PEMとは対照的に、NEM次元は負の感情、疑心、反発、そして攻撃性を反映する要因である。そしてCON次元は、統制、損害回避、そして伝統主義に特徴づけられる。CONが高くなるにつれて、用心、抑制、従来の道徳的見解の支持と関連するようになる。

検証の結果、「社会的逸脱(PPI-II)」要因は、幼少期や成人期における反社会的行動と同様に、アルコールおよび薬物乱用を含めた、様々な外在化行動と関連していた。その一方で、「情緒-対人関係(PPI-I)」要因は、成人期の反社会的行動にのみ関連していた。さらに人口統計的および様々な能力評価尺度において、「社会的逸脱」要因は社会的経済的地位指標における教育水準や知能と負の相関が示された一方で、「情緒-対人関係」要因は社会的経済的指標と有意な正の相関が得られた。この点からも、PPIにおける「情緒-対人関係」要因と「社会的逸脱」要因の両者は、根本的に異なった傾向の次元を捉えており、互いに関連していないことが実証された。

加えて、MPQによって示される気質の特徴として、「社会的逸脱」要因は、CON次元における統制、損害回避、および伝統主義と負の相関が示された一方で、NEM次元を構成する全ての特性、具体的にはストレス反応、疎外感、そして攻撃性と正の相関が示された。対照的に、「情緒-対人関係」要因は、PEM次元における社会的優越性、幸福感、そして達成感と極めて強い正の相関が得られた。その一方で、NEM次元、特にストレス反応の特性と負の相関が示された。さらに、「情緒-対人関係」要因は、CON次元における損害回避の特性にのみ負の相関が示された。

このように、PPIにおけるそれぞれのサイコパシーの特徴は多くの既存の尺度との関連が示されている。サイコパシーに関わる要因として、その他にも神経心理学的機能や衝動性の評価尺度を用いた実証研究が挙げられる。以下にそれらの研究例を取り上げ、それぞれのサイコパシーの特徴について記述する。

3-2. サイコパシー表出と神経心理学的機能

従来から多くの研究者や臨床家によって、前頭葉に損傷を受けた患者とサイコパスとの間の行動上の類似性が指摘されてきた（Hare, 1984）。Sellbom & Verona（2007）によれば、近年では非犯罪者のサイコパシー傾向と種々の神経心理学的検査によって測定される前頭前野皮質（prefrontal cortex: PFC）との間にある関係性を探求することに主な関心が向けられている。

前頭前野皮質は種々の認知処理機能と結びついているため、サイコパシーの表出は何らかの認知処理機能の欠如によって引き起こされると考えられている。彼らによると、サイコパシー傾向と前頭前野皮質の機能、特に「反応抑制（response inhibition: RI）」および「実行認知機能（executive cognitive functions: ECF）」との関連性については検証がなされてこなかった。反応抑制は不適応行動の抑制や、進行している反応の終結に関わっており、適応的な抑制とされる。その一方で実行認知機能は、物事を計画する能力、概念処理、認知的柔軟性、ワーキングメモリー、二重課題処理といった様々な認知処理機能を指す。

そこで彼らは大学生を対象として、PPI 2 要因と、神経心理学的機能としての反応抑制および実行認知機能との関係性について検証を行った。神経心理学的機能を測定する際、WAIS-IIIにおける「数唱・逆唱課題」、コンピュータ化された「Wisconsin Card Scoring Test: WCST」、そしてWISC-IIIにおける「迷路課題」などの神経心理学的検査が用いられた。

検証の結果、サイコパシーの神経心理学的機能の特徴として、PPI 得点の合計が高いほど、不適応行動の抑制に関わる反応抑制の得点が低いことが見出された。さらにPPIの「社会的逸脱」要因は、実行認知機能および反応抑制と負の相関が示されたが、そのうち特に反応抑制との関連が強いことが示された。したがって、反応抑制の欠如は実行認知機能の影響以上に、サイコパスにおいて見受けられる攻撃性や衝動性の一因である可能性が窺われる結果が得られた。この点は、Blackburn（1975）がサイコパスの中核的な特性として、衝動性や攻撃性、反社会性を位置づけたことと相応する。その一方で、PPIの「情緒-対人関係」要因の得点は反応抑制と関連していないものの、実行認知機能と正の相関が示された。したがって、サイコパスの中でも知的能力が高く、社会生活において犯罪行動や反社会的行動が表面化されていない群も少なからず存在する可能性が示唆された。

このように、我々は認知機能を測定することによって、非犯罪者の青年におけるサイコパシー傾向との関連性を把握しうることが推測される。特に反応抑制は個人の不適応行動を調節する役割を担っており、この機能が適切に働かなくなることで様々な外在化行動が発現すると考えられる。

3-3. サイコパシーと衝動性

先述した Sellbom & Verona（2007）の研究においては、社会的逸脱の高いサイコパシーの表出と衝動性との結びつきは神経心理学的に高い可能性が示唆された。ところで衝動性の概念は、遅延報酬への鈍感さ、欲求を抑えることの困難さ、そして抑制が必要な状況下において行動を抑えることの困難さを含む様々な定義が混在した状態である（Morgan ら, 2011；Schachar & Logan, 1990）。Morgan ら（2011）の研究では、衝動性を測定する尺度として、妥当性と信頼性が保証された自記式質問紙である the Barratt Impulsiveness Scale-11（BIS-11）が用い

られた。BIS-11では、衝動性は運動、無計画性、注意の3つの下位尺度から構成される。さらに、彼らは衝動性の様々な概念を測定することを目的に、GoStop Impulsivity Paradigm、Two Choice Impulsivity Paradigm、Delay Discounting Task、そしてIowa Gambling Taskの4つの行動尺度を使用した。

Morganらの研究は、80名の一般成人を対象として、BIS-11および行動尺度におけるどの衝動性の側面がサイコパシーと関連しているかを検討することを目的に実施された。彼らはサイコパシーの測定に関してはPPIの改訂版であるPPI-Rを使用した。

PPI-RはPPI同様に、二つの要因から構成されるが、その要因の項目名が変更されている。「情緒-対人関係 (PPI-I)」要因は、「恐れのない支配 (Fearless Dominance)」要因と変更された。この項目の得点が高くなると、不安の欠如と対人的優越性の高い水準を反映するものと捉えられる。一方、「社会的逸脱 (PPI-II)」要因は、「自己中心的-衝動性 (Self-Centered Impulsivity)」要因と変更された。この項目が高いことは、他者を凶々しく利用し、無謀な衝動性を反映するものと捉えられる。

検証の結果として、BIS-11により算出された衝動性の合計得点はPPI-Rの合計得点と中程度の有意な正の相関が得られた。さらに、衝動性の合計得点はサイコパシーの「自己中心的-衝動性」要因と強く関連していた。特に衝動性の下位尺度である「無計画性」は、サイコパシーの「自己中心的-衝動性」と強く関連した。

サイコパシーと衝動性尺度との関連を実証したことによって、MorganらはPPI-Rの妥当性を支持するいくつかの知見を得ることができた結論づけている。特に衝動性の高さは、サイコパシーの反社会性や攻撃性を反映する要因と強く関連していることが示された。しかしながら、衝動性の行動評価尺度とサイコパシーの間には統計的な有意差が見られていないことから、多様な側面から成る衝動性の解明については研究の余地が残されている。

4. PPIに基づくサイコパス類型のパーソナリティ特性および精神病理の検討

本稿では、サイコパスの定義、そして尺度開発の経緯を概観し、いくつかの実証研究を紹介してきた。以下、Benningら(2003)、Sellbom & Verona(2007)、Morganら(2011)の研究によって実証された点を踏まえて、サイコパスの類型間におけるパーソナリティ特性と精神病理について包括的に考察する。

4-1. PPI-I型サイコパス

パーソナリティ特性について、PPI-I型のサイコパスは、認知機能や言語性知能に優れ、また自らの衝動や攻撃性をその時の状況に合わせて抑えることができるという知的さと、狡猾さによって特徴づけられる。そのため、彼らは通常自身の攻撃性や反社会性を行動化しないと考えられる。幼少期より、彼らは反社会的行動と結びつかないような社会的・経済的に恵まれた環境の下で良質な教育を受けて育ち、いわゆる「いい子ちゃん」として育ってきたような印象を受ける。したがって、表面的には冷静であり、大人しく、権威者にとって従順であるように見受けられる。しかし、彼らは一方で達成感や社会における優勢的な地位や名声を得ることを求める野心家とし

での側面があり、自らの目標を達成するためには他者を排除することも厭わないような冷淡さと冷淡さを兼ね備えるような人物像が浮かび上がる。

このような PPI- I 型の人物像は、Freyhan (1951) が指摘した意欲の欠如したサイコパスとの類似性が窺われる。意欲の欠如したサイコパスについては、説得力があり、知的で、都会的な雰囲気醸し出す者もあり、彼らは様々な職業上、社会生活上においてずば抜けた能力を発揮しようと記述されている。Schneider (1946) のサイコパス特性に従えば、情性欠如性と相応する。彼は情性欠如者の特徴として、犯罪を行う情性欠如者の他に、十分に社会的な情性欠如者も存在しており、しばしばその知能はずば抜けていることを指摘している。

彼らの人物像はまた、近年パーソナリティ心理学や異常心理学領域において研究対象にもなっている、成功するサイコパス (successful psychopath) にも対応性がある (Ishikawa ら, 2001; Mullins-Sweatt ら, 2010)。Mullins-Sweatt ら (2010) によれば、成功するサイコパスとは、主として冷淡さといったサイコパスの根本的な特性を有しつつ、サイコパス基準に適合する個人であるものの、社会的に功績を挙げるような個人を指す。さらに彼らによると、成功するサイコパスは、自己愛性パーソナリティ障害と最も強く正の相関を示すとともに、反社会性パーソナリティ障害とも強い正の相関を表す。一方 Ishikawa (2001) らは、成功するサイコパスを、悪事を働く様々な犯罪を回避する“コミュニティ単位”に存在するサイコパスであるとした。

しかしながら、Mullins-Sweatt ら、Ishikawa らの研究では、サイコパシー評価尺度として PPI が用いられずに、それぞれ他のサイコパシー評価尺度が用いられているため、実際に「PPI- I 型サイコパス」と「成功するサイコパス」はどの程度関連しているかについては量的に検討されていない。したがって、成功するサイコパスの概念についても既存の尺度との関連性を検討した上で妥当性を測り、信頼性と妥当性を担保した上で検討することができるようになる研究が求められる。また、PPI- I 型のサイコパスは社会的逸脱や衝動性との関連が低いにも関わらず、なぜ成人期において反社会的行動と結びつくのかについては検討がなされていない。彼らが反社会的行動を引き起こす要因の検討や発現プロセスを検証することが今後求められる。

4-2. PPI- II 型サイコパス

PPI- I 型のサイコパスとは対照的に、PPI- II 型のサイコパスは、神経学的機能上、自らの感情を様々な状況に見合う形で適切に処理することが困難であり、まさに衝動的、感情的に問題解決を図るような人物像が浮かび上がる。彼らは生来的にストレス耐性が弱いため、何らかのストレス刺激に伴って不安や葛藤を喚起しやすいことが容易に推測される。しかし、ストレスに対しては衝動的、感情的に対処するのみであり、なぜ自分がストレスや不安を感じているかについての自己洞察に向かうことがない。

今留 (2008) は、ストレス要因に対する情動中心のコーピングは身体的健康度および精神的健康度を低下させることを明らかにしている。したがって彼らの攻撃性や反社会的行動といった、情動を中心とするストレス対処方略は、彼らとその内面に抱えている、ある種の言語化できない身体的・精神的不和感を助長させていることも示唆される。Verona ら (2001) は、PPI- II 型のサイコパスと同様に、NEM が高く、CON が低いといった気質を有する衝動的、反感的な個人は、ストレスが蓄積される状況下では、他者あるいは自分自身に向けて攻撃や敵意が向けられる危険

性が高まることを明示している。加えて、彼らは反社会性パーソナリティ障害と強く関連することも実証している。

さらに、彼らの攻撃性や反社会性は幼少期から成人期にかけて継続している点も特徴的である。Lynam (1998) によれば、多動性、衝動性、注意及び行動上に問題がある児童 (HIA-CP children) は、精神病理を抱える成人と極めて類似しており、慢性的な反社会的行動の最も強力な危険因子であるとした。Lynam はまた、HIA-CP 児童は児童サイコパス (child psychopath) となる傾向がより高いことを実証している。Lynam によると、児童サイコパスとは、深刻で安定的に非行行動を引き起こす 12-13 歳の児童を指し、暴力的で反社会的な行動、衝動性や攻撃性が強く機能するパーソナリティである。彼らに対して何らかの治療的介入が行われない限り、慢性的に反社会的行動が持続されると結論づけた。さらに興味深い知見として、Krueger ら (2002) は、後期青年期において発現する様々な外在化行動を、通常のパーソナリティ水準から精神病理水準にまで及ぶとするスペクトラム上の障害であると提唱した。その上で、彼らの非抑制的なパーソナリティ、薬物依存、および反社会的行動といったそれぞれの外在化の障害は、遺伝性のある外在化要因と結びついており、その表現型は特定の遺伝子や環境要因によって変化すると主張している。

PPI-II 型サイコパスに特有のパーソナリティや外在化行動については、幼少期から成人にかけて持続する、連続性のある精神病理であることが窺われる (Benning ら, 2003; Krueger ら, 2002; Lynam, 1998)。それゆえに外在化行動のそれぞれの表現型についての発現プロセスを検討することは、児童・思春期児童の問題行動を予測することや、成人を対象とする精神病理のアセスメントを行う際に重要であると考えられる。

5. 生物学的モデルから捉えるサイコパス

今日の先行研究においては、サイコパシーと前頭葉機能との関連や、特定の遺伝子型と環境との相互作用によるサイコパシーの表現型を精緻に検討する必要性が指摘されている (Benning ら, 2003; Hare, 1984; Ishikawa ら, 2001; Krueger ら, 2002; Lynam, 1998; Sellbom & Verona, 2007; Verona ら, 2001)。

Sellbom & Verona (2007) は、扁桃体および前頭眼窩皮質 (orbitofrontal cortex: OFC) の脳部位が、最も不適応な表現型を示すサイコパシーの諸様相を調整する可能性があることを主張している。前頭眼窩皮質は、強迫性障害の病態生理に関与していることで注目されている脳部位でもある (松本ら, 2011)。

さらに Benning ら (2003) も述べているように、サイコパシーと Cloninger によって開発された一連のパーソナリティ尺度との関連を見るのも有用である。MRI を用いた脳科学の知見に基づけば、Cloninger (1987) により開発された尺度である The Three-dimensional Personality Questionnaire (TPQ) によって測定される気質次元の違いによって、脳部位における神経構造が異なることが見出されている (Gardini ら, 2009)。Cloninger が作成した TPQ をはじめ、Temperament and Character Inventory (TCI) が捉える気質次元は神経生物学的指標と結びついていることで知られているため、生物学的にエビデンスのある結果を得ることが

できる。

いずれにせよ、Sellbom & Verona も述べているように、今後のサイコパス研究としては、各脳部位における何らかの機能異常がサイコパシーの諸様相と関連しているかどうかについてのさらなる根拠を検証する必要があるだろう。それにより、サイコパシー表出を含め、個人の精神病理の発症メカニズムを明らかにすることにも繋がる可能性がある。

6. 今後の課題

サイコパスの実証的研究は、今後脳科学や遺伝学を総括する生物学の観点を踏まえた研究によってより一層加速していくものと考えられる。しかし、サイコパスを生得的な特質として捉えた考え方は今に始まったわけではない。かつて Schneider (1946) は、神経症は素質的に異常なサイコパスの上に育つと述べている。また Freyhan (1951) も、意志や欲求および忍耐が欠如した特徴を持つサイコパスは、乳幼児の段階から痙攣的な不随意運動や夜尿症、そして爪噛みといった神経学的徴候が見受けられると述べている。したがって、現代のサイコパスの研究者は、偉大な先人たちが残していった優れた臨床的知見に対して、科学的に意味づけを行っている過程なのだ、筆者はそのような気がしてならない。

しかし遺伝子で全ての疾患の発生を説明できるようになるわけではなく、近年の洗練された遺伝学・疫学の知見は、むしろ心理社会的な働きかけによって環境を整えることの重要性を改めて示している（西園マールハ、2017）。藤原（2017）によると、胎児期の環境、乳幼児期の親の関わり方、そしてそれほど強力ではないものの幼少期に置かれた環境により、子の遺伝子発現が変わってくるのがわかってきている。藤原は、ラットの研究を引き合いに出し、ラットの中でよく子を撫でたり舐めたりする親に育てられた場合、遺伝子発現が変化し、ストレスに強くなることが明らかになっているとも述べている。

以上を踏まえると、今後のサイコパス研究の方向性として、生物学的視点からの研究に留まらず、乳幼児期から幼少期にわたり発達に影響を及ぼしうる環境因子についても同様に検討することが求められよう。例えば、乳幼児期における家族との関係性、親子間の愛着形成の問題、児童が学校の中で置かれている立場、友人との関わり方などを挙げるができる。池田ら（2017）は、虐待やトラウマといった生育環境要因が、その後の学業・結婚・就労等における過酷な状況を導き、障害を抱えた後の回復の阻害要因にまで繋がっている可能性について言及している。

最後に、PPI の尺度は依然として日本語版として標準化されていない。したがって、我が国におけるサイコパス研究を含めたパーソナリティ研究、および異常心理学研究の発展のために日本語版尺度の早期の開発が望まれる。

引用文献

- Benning, S.D., Patrick, C.J., Blonigen, D.M., & Krueger, R.F. (2003). Factor structure of the psychopathic personality inventory: Validity and implications for clinical assessment. *Psychological Assessment, 15*, 340-350.
- Blackburn, R. (1975). An empirical classification of psychopathic personality. *The British Journal of*

- Psychiatry*, 127, 456-460.
- Cleckley, H. (1976). *The mask of sanity*. St Louis, MO: Mosby.
- Cloninger, C.R. (1987). A systematic method for clinical description and classification of personality variants. A proposal, *Arch Gen Psychiatry*, 44, 573-588.
- Freyhan, F.A. (1951). Psychopathology of personality functions in psychopathic personalities. *The Psychiatric Quarterly*, 25, 458-471.
- Gardini, S., Cloninger, C.R., & Venneri, A. (2009). Individual differences in personality traits reflect structural variance in specific brain regions. *Brain Research Bulletin*, 79, 265-270.
- Gruzca, R.A., Przybeck, T.R., Spitznagel, E.L., & Cloninger, C.R. (2003). Personality and depressive symptoms: A multi-dimensional analysis. *Journal of Affective Disorders*, 74, 123-130.
- Hare, R.D. (1984). Performance of psychopaths on cognitive tasks related to frontal lobe function. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 133-140.
- Hare, R.D. (1991). *The Hare Psychopathy Checklist - Revised*. Toronto, Ontario: Multi-Health Systems.
- 藤原武男 (2017). ライフコースとエビジェネティクスからみたメンタルヘルス 日本社会精神医学雑誌 26 (2), 110-116.
- 池田朋広・常岡俊昭・松本俊彦・高木のり子・石垣理江・種田綾乃・小池純子・齋藤勲・森田展彰・稲本淳子・岩波明 (2017). 措置指定病院における精神病性障害と物質使用障害を併せ持つ「精神病性併存性障害者」への集団認知行動療法プログラム実施の意義とその有効性の検討 日本社会精神医学雑誌 26 (1), 11-24.
- 今留忍 (2008). 身体的・精神的健康度に対するコーピングの影響 日本未病システム学会雑誌 14 (2), 147-154.
- Ishikawa, S.S., Raine, A., Lencz, T., Bihrl, S., & Lacasse, L. (2001). Autonomic stress reactivity and executive functions in successful and unsuccessful criminal psychopaths. *Journal of Abnormal Psychology*, 110, 423-432.
- Krueger, R.F., Hicks, B.M., Patrick, C.J., Carlson, S.R., Iacono, W.G., & McGue, M. (2002). Etiologic connections among substance dependence, antisocial behavior, and personality: Modeling the externalizing spectrum. *Journal of Abnormal Psychology*, 111, 411-424.
- Lilienfeld, S.O., & Andrews, B.P. (1996). Developmental and preliminary validation of a self-report measure of psychopathic personality traits in noncriminal populations. *Journal of Personality Assessment*, 66, 488-524.
- Lynam, D.R. (1998). Early identification of the fledgling psychopath: Locating the psychopathic child in the current nomenclature. *Journal of Abnormal Psychology*, 107, 566-575.
- 松本良平・中前貴・伊藤浩・高橋英彦・福居顕二・須原哲也 (2011). 強迫性障害の脳画像研究の発展と病態仮説 精神神経学雑誌 113 (1), 45-53.
- Morgan, J.E., Gray, N.S., & Snowden, R.J. (2011). The relationship between psychopathy and impulsivity: A multi-impulsivity measurement approach. *Personality and Individual Differences*, 51, 429-434.
- Mullins-Sweatt, S.N., Glover, N.G., Derefinko, K.J., Miller, J.D., & Widiger, T.A. (2010). The search for the successful psychopath. *Journal of Research in Personality*, 44, 554-558.
- 西園マールハ文 (2017). 特集にあたって 日本社会精神医学会雑誌 26 (2), 108-109.
- Schachar, R., & Logan, G. (1990). Impulsivity and inhibitory control in normal development and childhood psychopathology. *Development Psychology*, 26, 710-720.
- Schneider, K. (1946). *Beitraege zur Psychiatrie*. Thiem, Wiesbaden (シュナイダー, Kurt フーバー, Gerd・グロス, Gisela (解説) 針間博彦(訳) (2015). 新版 臨床精神病理学 文光堂 pp.15-16, pp. 18-26, p.32.
- Sellbom, M., & Verona, E. (2007). Neuropsychological correlates of psychopathic traits in a non-incarcerated sample. *Journal of Research in Personality*, 41, 276-294.
- Tellegen, A. (1982). *Brief manual for the Multidimensional Personality Questionnaire*. Unpublished

manuscript, University of Minnesota.

Verona, E., Joiner, T.E., & Patrick, C.J. (2001). Psychopathy, antisocial personality, and suicide risk. *Journal of Abnormal Psychology, 110*, 462-470.